

英国農村への旅／「美しい田園」への長い道

谷口吉光（秋田県立大学）

9月下旬、夏休みを利用して家族・知人と一緒にイギリスの農村を旅してきた。美しい田園風景で有名なコッツウォルズ地方を中心に1週間のんびり過ごしてきた。

毎日レンタカーを運転して私たちを案内してくれたのは以前県立農業短大で同僚だった青木辰司さんだ（現在東洋大学教授）。イギリス農村を研究している青木さんは日本人が知らない小さな村をたくさん知っていた。ブロードウェイ、ペンブリッジ、ウェブレー、ヘイ・オン・ワイ……。車を止めて散策したり、アンティークショップや教会をのぞいたり、カフェのテラスでお茶を飲んだり。どこも人口数百人から数千人だろうか。観光化されているところはほとんどなく、地元の人が暮らす普通の村だ。

日本だったら「何もない田舎」ということになるのだろうか。でも空っぽという感じは全然しない。どの村にも人が集まる一角があり、夜に酒を飲んだり食事ができるパブがあった。家並みは古くつつましく、でもきれいに手入れされ、花が飾られ、通りにはゴミひとつなかった。栄えているとか元気だとかいう印象は少しも受けなかったが、落ち着いた生活のぬくもりが確かに感じられた。そのぬくもりに私たちは包まれ、心地よくゆったりした気持ちでいられた。

「それがイギリスのカントリーサイドの魅力なんだ」と青木さんはいう。「カントリーサイド」とは農村地域という意味だが、適当な日本語がなく英語のまま使われている。「農村」はややもするとマイナスのイメージを伴うが、カントリーサイドのイメージは断然プラスだ。

中西輝政氏の『大英帝国衰亡史』には「イギリスでは成功した人間はほとんどつねに『田園』をめざした。イギリスではつねに『田舎に土地を持つこと』が他の何にも増して、人生における成功を意味した」とある。この「田園」がカントリーサイドのことだろう。

「農村」や「田舎」がしばしば遅れや貧しさを連想させる日本に対して、イギリスの「カントリーサイド」は輝きと誇りに満ちている。田園を愛するから美しくしようと、美しいからなお愛する。田園独特の景観や歴史的建造物を執拗なまでに保全しようとするイギリスの農村政策の底には、イギリス人の田園への深い愛があるように感じる。

振り返って、私たち日本人が自分の地域に誇りを持ち、田畑や農村の荒廃が止まり、人が住み続けられるようになるにはどのくらいの時間が必要なのだろう。あるガイドブックに「イギリスが美しい田園を取り戻したのは、産業革命や大英帝国時代の膨大な負の遺産を処理してからのことだった」とあった。これを日本に当てはめれば、私たちが美しい農村と誇りを取り戻せるのは、「近代化と経済成長の負の遺産を処理してから」ということになるだろう。長い道だが、何としてもこの道を進まなければならない。

（朝日新聞「あきた時評」 2005年11月26日掲載分を加筆・修正した）